

第5章

プーチン体制の起源と戦争責任をどう捉えるか

—在外ロシア反体制派の二つの言説—

法政大学法学部教授 油本真理

はじめに

ウクライナ侵攻後、ロシア国内では野党勢力の活動が困難になった。国内では戦争に反対の意見を表明すれば罪に問われかねない状況となった。国内で活動している政党のうち、ヤブロコなどは例外的に戦争に対して批判的な意見を表明しているが、選挙への参加にも様々な障壁が課されている。

こうした中で注目を集めるようになったのが在外反体制派である。在外反体制派には様々な考えを持つ人が含まれており、特定の潮流に分けられるものではないが、現実政治にも一定の影響を持ちうる存在として、2010年代からすでにヨーロッパに拠点を移したミハイル・ホドルコフスキーを中心とする亡命反体制派ネットワーク¹と、比較的最近欧州に拠点を移した「反汚職基金」(アレクセイ・ナワリヌイによって設立された組織。本論文ではロシア語名(Фонд борьбы с коррупцией)の頭文字をとってFBKと表記する)が二大潮流として挙げられる。

両陣営はいずれも政権からの人権侵害に直面した経験があり、プーチン政権に対して批判的な立場をとっているにもかかわらず、今に至るまで協力関係を築くには至っていない。とりわけ、FBKとホドルコフスキー陣営は、それぞれが在外反体制派の中核となるネットワークの形成を志向し、並行的に動員や組織化を進めてきた点で、むしろ競合的な関係にある。2024年11月には、ユリア・ナワリナヤが主導する「ロシアの未来のプラットフォーム」の会議がリトアニアで開催される一方、ほぼ同時期にホドルコフスキー陣営もドイツ・ベルリンで大規模な集会を実施しており、在外反体制派が単一の枠組みに収斂するのではなく、分極化している現状がうかがえる²。両者の協力が難しいのはいったいなぜなのだろうか。

本稿では、その背景要因の一つとして、各陣営がプーチン政権の起源やウクライナ侵攻についてどのような立場をとっているのかという点に注目する。具体的には、ホドルコフスキー陣営とFBKが、(1)プーチン政権はいかにして生み出されたのか、(2)ウクライナ侵攻の責任は誰に帰されるべきか、という二つの点において大きく異なる認識に立っていることを明らかにする。その結果、両者の言説は互いの責任論や政治的正統性を部分的に毀損し合う関係にあり、協力関係の形成を困難にしていることを示す。

在外反体制派内部の亀裂はこれまでもたびたび注目を集めてきた。Shamiev and Luchenkoは、ロシア人ディアスポラについて、世代の違い、共通のプラットフォームの不在、資金獲

得をめぐる競争などによって協働が困難になっていることを指摘している³。また、Turchenko and Zavadsкая は、在外反体制派を、ターゲットとするコミュニティと活動の内容に沿って分類し、ホドルコフスキーは亡命ロシア人を、FBK はロシアのロシア人を主要なターゲットとしていることを示している⁴。本稿はこれらの先行研究の見方を踏まえたうえで、両者の、言説的前提や歴史認識といったより根本的な差異に迫ろうとするものである。

以下ではまず、ホドルコフスキー陣営、また、FBK の亡命に至るまでの経緯を明らかにしたうえで、それぞれの陣営の歴史観および責任論を明らかにする。そのうえで、両者がなぜ協力できないのかについての検討を行う。

1. 在外反体制派の活動概要

本節ではまず、本稿で取り上げるホドルコフスキー陣営および FBK の亡命に至るまでの経緯、および活動の概要を紹介する。

1-1. ホドルコフスキー陣営

ホドルコフスキーは 1990 年代にオリガルヒとして知られるようになり、政治にも関与した人物である。彼はメナテップ銀行を成功させたのち、石油会社ユーコスを率い、一時は「ロシアで最も裕福な人物」と見なされていた。2000 年代に入ると彼は野党勢力や市民団体への資金提供、選挙支援などを行い、政権側との対立が先鋭化した。最終的にホドルコフスキーは有罪判決を受け、10 年あまりを刑務所で過ごした後、ソチ・オリンピックを控えた 2013 年 12 月、恩赦により釈放され、ヨーロッパへと送られた。彼は一時スイスにも滞在していたが、最終的には英国に拠点を置いている。

ホドルコフスキー自身が政治活動を再始動する転機となったのは、釈放の 2 か月あまり後に起きたウクライナ危機であった⁵。彼はロシア社会の外部からも政治的発信を行う必要性を強く認識し、亡命先からの組織的活動を本格化させる決断に至った。その具体的な表れが、2014 年 9 月の Open Russia の活動再開である。オンライン会議を基盤として再構築された同組織は、自由選挙、法の支配、独立メディアの擁護、政治活動家の保護といった価値を掲げて政治的発信と市民的連携を担うプラットフォームとして位置づけられ、以後、ホドルコフスキーの亡命先における政治活動の中核をなす存在となった⁶。

2022 年にウクライナの全面侵攻が始まると、ホドルコフスキーはさらに活動の幅を広げた。全面侵攻開始後の重要な取り組みとしては、ガルリ・カスパロフ、ミハイル・カシヤノフ、ウラジーミル・カラ＝ムルザらとともに「反戦委員会」を創設したことが挙げられる⁷。この「反戦委員会」はウクライナ侵攻の問題点を指摘するとともに、ウクライナへの支援とロシア国内外の反戦派との連携を強めることを主な目的とした。また、彼は、反戦・反プーチンを理由として亡命したロシア人が外国で生活基盤を確立するための各種支援を行う「アーク (The Ark)」プロジェクトにも資金支援を行っている⁸。

1-2. FBK

FBK は、政府高官や政権中枢における汚職の調査・告発を目的とする反体制組織であり、

2010年代初頭にナワリヌイを中心として形成された⁹。FBKは、調査報告や動画を通じた情報発信を主要な活動手段とし、2010年代を通じてロシア国内における反体制運動の一つの拠点として機能してきた。

しかし、ナワリヌイが2021年にロシアに帰国した直後に拘束・収監され、FBKがロシア当局によって「過激派組織」に指定されると、組織としての国内活動は事実上不可能となった。このため、FBKの主要メンバーはロシア国外に拠点を移し、ナワリヌイを獄中に残したまま、在外反体制派としての活動を本格化させることとなった。

亡命後のFBKは、YouTubeなどのオンライン・プラットフォームを基盤とした情報発信を中心に活動を継続している。組織運営や調査活動の中心は国外に移行したものの、FBKは引き続きナワリヌイを象徴的指導者と位置づけて活動を継続している。

2022年以降、ウクライナ侵攻やロシア国内での政治環境のさらなる悪化を背景として、FBKは国際社会との接点を拡大する必要に迫られ、国際部門（ACF International）を立ち上げた¹⁰。この組織を通じ、欧州議会や各国議会・政府とのロビー活動、国際会議での発言などといった対外的・国際的な活動を組織的に拡大した。

2024年2月にナワリヌイが獄中で死亡した後は、妻であるユリア・ナワリナヤが国際的な場での発信を担うようになった¹¹。ナワリナヤ自身は夫の死の責任追及などを活動の中心にすえ、さらに囚人交換で釈放されたカラ＝ムルザやイリヤ・ヤシン等のロシア人反体制派と共同行動を取ることも多い一方で、FBK本体は従来通り汚職の調査や調査報道を継続しており、両者は一定程度分業している。

2. 在外反体制派における歴史観と戦争認識

本節では、ホドルコフスキー陣営およびFBKが、亡命後にどのような歴史認識と責任論を提示してきたのかを、回顧録、ブログ、映像作品、公開声明といった一次資料に基づいて明らかにする。なお、ホドルコフスキーは様々な著作を長期にわたり公表しているが、ここではFBKとの比較を明確にするため、2022年以降の論考や発言を中心に取り上げる。分析にあたっては、まず両者の前提となる歴史観を確認したうえで、プーチン政権の成立過程を誰の責任として捉えているのか、さらにウクライナ侵攻の原因と責任をいかに説明しているのかを検討する。

2-1. 前提となる歴史観

ホドルコフスキーの歴史観は、自らが1990年代の政治経済秩序の形成に関与したという経験と密接にかかわっている。ホドルコフスキーは、エリツィン時代を比較的肯定的に評価している。まず、ソ連の崩壊に向かうプロセスについて、ホドルコフスキーは、ロシアの人々のヒロイズムとクーデタの失敗が「自由市場民主主義」への道を実証したとする¹²。次に、エリツィン時代初期のラディカルな経済自由主義改革についてもおおむね肯定的な評価をしている¹³。とりわけ、悪名高い「担保私有化」が国家とビジネスマンの間で行われた取引であったことを率直に語っている点は、一般的な認識とのずれを感じさせる¹⁴。他方、プー

チンは、エリツィンとは異なる「新しいタイプの指導者」として描き出される。ホドルコフスキーは当初はプーチンと個人的にコンタクトをとることもあった。ホドルコフスキーは当初はプーチンが民主主義的な価値観を守るかのような発言をしていたことから安心していましたが、次第にリベラルな価値観を信じていないことが明らかになり、距離を置くようになった¹⁵。そのクライマックスともいえるのがユーコス事件であった。

これに対し、FBK は、プーチン期のみならず、エリツィン期についても厳しい評価をしている点に特徴がある。ナワリヌイは『PATRIOT』で自身の半生を振り返っているが、その中で特徴的なのは、彼がエリツィンを当初支持しながら、1990年代半ばに幻滅するに至ったという点である。ナワリヌイは私的なことがきっかけでエリツィンに幻滅したという¹⁶。時は1996年の大統領選挙後、当時若者だったナワリヌイは、「クール」な外車をドイツで安く買ってロシアに持ち帰ろうとした。当初買おうとしていた車は買えず、妥協した車を持ち帰ろうとした際、彼は輸入車の通関をめぐる賄賂の横行、さらにはエリツィンの報道官に対応するための恣意的な業務停止などを目の当たりにすることになった。この不愉快な出来事を経て、ナワリヌイは、エリツィン政権は取り巻きと利権で動いているとの認識を持つようになった。改めて指摘するまでもなく、ナワリヌイはプーチンに対しても手厳しい。しかし彼は、現在のロシアが抱える問題の多くは、すでにエリツィン期にその原型が形成されていたと捉えている。

2-2. プーチン政権を生み出したのは誰か

この歴史観の相違は、そのまま、今のようなプーチン政権を生み出したのは誰かという論点につながる。ホドルコフスキーは、指導者のバックグラウンドや性格のみに帰するのではなく、社会の変化にも目を向けている。1990年代後半になると、西洋的な価値観にさらに傾倒するようになった自らとロシアの一般の人々との乖離も明らかになったとも述べる¹⁷。当時、ロシアでは金融危機の影響で人々は苦しい生活を送っており、1930年代のワイマール共和国と似た状況になっていたという。すなわち、1930年代のワイマール共和国において、第一次大戦後に締結されたヴェルサイユ条約があまりにも厳しく、人々の苦境の原因となっていると考えられたのと同様に、ロシアにおいても、ロシアの苦境を生み出した元凶として欧米が敵視されるようになったということである。もちろん、こういった認識はプーチンの登場によってより強化された面もあるが、すでにそれ以前から人々の感覚が変化していたことが示唆されているのである。

ナワリヌイは2023年8月に公開されたブログポスト「私の恐怖と嫌悪」¹⁸において、まず、1990年代に国を率いた人々を批判する。ナワリヌイ曰く、彼らこそが、KGBをバックグラウンドに持つプーチンを権力の座に招き入れた責任を負うべきなのである。さらに彼は、「独立メディア」や「民主的な世論」にも問題があったと述べる。その理由として挙げられるのが、彼らこそが、1996年大統領選挙の不正を全面的に支持したという点である。ナワリヌイは自らもかつては1990年代の改革派政治家たちを熱心に支持し、さらには1996年大統領選挙の不正を気に留めなかったことを自己批判している。

もっとも、彼の死後、「私の恐怖と嫌悪」から着想を得る形で、マリア・ペフチフ（調査ジャーナリストであり、FBK 理事会議長を務める）が主導して出された FBK の動画『裏切り者』においては、その構図はより単純化されている¹⁹。ここでは、1990 年代に何らかの形でエリツィン大統領を支援した人々が、プーチン政権を生み出した「共犯者」として扱われる。その一方で、一般の人々はあくまでも受動的な被害者として描き出される。1990 年代、とりわけ 1996 年の大統領選挙は情報操作等によってゆがめられ、人々の意思は反映されていなかったのである。『裏切り者』のエンディングで、ペフチフは、プーチンは 1990 年代の政治家やオリガルヒからの「贈り物」であり、我々は彼を公正な選挙で選んだわけではないし、後継者として指名したわけでもないとしたうえで、我々がプーチンの「狂気」を止めなければならないと呼びかけている。

2-3. ウクライナ侵攻の責任を何に見出すか

ホドルコフスキーは、プーチン政権がウクライナ侵攻の開始に至った背景を、プーチンの「発見」に求めている²⁰。ホドルコフスキーは、プーチンは当初からウクライナやクリミアに強い思いを持っていたわけではなく、少なくとも戦争をしてまで取り返すべきとは考えていなかったとみる。しかし、経済が衰退局面に入った際、プーチンは「ポスト帝国主義的ノスタルジー」の有用性を発見したのだという。そこでプーチンはこれに、スラヴ三民族兄弟論とスラヴ主義的な言説を結び付けた。その結果として、ウクライナはロシアから切り離せない存在と捉えられるようになった。もっとも、この「発見」だけで必然的にウクライナ侵攻へと至ったわけではなく、歴史的偶然も作用したというのが彼の見方である²¹。2014 年にウクライナで起きたマイダン革命によってヴィクトル・ヤヌコーヴィチ大統領が事実上追放されたことは、プーチンにとってはロシアの主権に対する攻撃、および個人的な侮辱に他ならなかった。まさにそのことにより、ロシアはウクライナをいかなる代償を払っても支配しなければならないという国家政策が発動されるに至ったのである。クリミアの併合はその一歩にすぎず、ウクライナに対する全面侵攻へと展開することになったのはある意味で当然の帰結であった。

つまるところ、戦争の責任は何に見出せるのか。こうした政策がとられた要因について、ホドルコフスキーは、プーチン自身の思想的「発見」や歴史的偶然の影響を示しつつも、同時にロシアの人々にも求めている²²。プーチンは 2005 年から「ソ連の崩壊は地政学的な悲劇だ」と述べるなど、拡張主義的な言説を口にするようになった。ホドルコフスキーは、こうしたプーチンの言動は、主に年長者に共有されている「ロシアを再び偉大な国にしてほしい」という願望を反映したのもであったと論じる。2023 年 12 月に出された動画では、ホドルコフスキーは、長年の無関心や黙認により独裁を許してしまったという点で一般のロシア人も集団的な責任を共有しているとも述べている²³。

これに対し、FBK は、ウクライナ侵攻を、腐敗した独裁政権が一方的に始めた犯罪と説明する。こうした姿勢は様々な動画でたびたび言及されているが、文書の形でわかりやすくまとめられたものとしては、2023 年 2 月 20 日にナワリヌイによって出された「自国にとっ

での善を望むロシア市民の 15 項目」²⁴が挙げられる。この中でナワリヌイは、今般のウクライナ侵攻を 2014 年から続く戦争であると位置づけたうえで、戦争の真の原因は、ロシア国内の政治的・経済的問題、プーチンがどんな手段でも権力を維持しようとする姿勢、そして自らの歴史的遺産—「皇帝＝征服者」や「領土を拡張した統治者」として歴史に名を刻むこと—への執着にある、と述べている。

FBK の議論では、戦争の責任はひとえにプーチン、およびその取り巻きにあるということになる。FBK が戦争に加担しているとする政治家や官僚らに対する制裁を求めて国際的なロビイング活動を展開していることはまさにその表れである²⁵。他方、一般市民は被害者と描写される。侵攻開始直後の 2 月 28 日に出された「ロシアはプーチンではない。市民的不服従運動を発表する」²⁶では、ウクライナ侵攻の主体をプーチン個人に限定し、一般市民を「代表されていない存在」と位置づけている。そのおよそ 1 年後に出された「15 項目」ではロシアの人々の帝國的な意識への言及はあるものの、「ロシアには、歴史的な背景を持つ他の国々と同様、帝国主義的な考えを持つ人々が常に存在するが、彼らは決して多数派ではない」としたうえで、そうした人々は選挙で打ち負かさなければならない、と述べられるにとどまる。

3. 責任論が生み出す相互緊張

ホドルコフスキー陣営と FBK 陣営が採用する責任論の違いは、単なる評価の相違にとどまらず、結果として互いの政治戦略や政治的正統性を制約し合う関係を生み出している。ここでは、その制約が(1)国際社会における対外的正統性、(2)亡命政治家としての正統性という二つの次元で表れることを示す。

まず、両陣営の責任論は全く異なる方向を向いており、妥協点が見出しにくいという点が挙げられる。前節で明らかにした通り、ホドルコフスキーはプーチン政権の誕生やウクライナ侵攻に関して、一般のロシア人も含めた責任を指摘する傾向がある。これは、FBK の、一般のロシア人は現在進行中の出来事には無関係である、だからこそ、今こそ立ち上がり、政権やその取り巻きがやっていることを止めなければならない、という言説とは真っ向から対立する。FBK の主張は、一般のロシア人を被害者と語ることから、国際社会ではロシアの侵攻責任を相対化しようとしていると捉えられる余地がある²⁷。このような評価が存在する中で、同じ在外反体制派からより包括的な責任論が提示されることは、とりわけロシア国外においては FBK の言説を相対化し、その説得力を低下させる効果を持つ。その中でも有力なホドルコフスキー陣営が真っ向から異なる主張を展開していることは、FBK の立場を一層脆弱にしていると言えるだろう。

また、ホドルコフスキー陣営と FBK の立場の相違は、亡命政治家としての正統性そのものの問題にもかかわる。FBK の立場は、ロシア社会の大多数は代表されてこなかった存在であると位置づけ、戦争や権威主義の責任を主としてプーチンおよび腐敗したエリート層に帰属させる点に特徴がある。この枠組みは、特にロシア国内に野党との連帯を呼びかけるという観点からは一定の合理性を有している。しかし、こうしたスタンスはホドルコフスキー

にとっては打撃になりうる。なぜなら、オリガルヒであったというマイナスイメージが付きまとうホドルコフスキーにとって、FBKの言説は、その問題を蒸し返し、反体制政治家としての正統性を問い直すことにもつながりかねないためである。実際に、ホドルコフスキーはこうしたFBKの姿勢に対しては警戒心を隠さない。これは、FBKが制作した『裏切り者』をめぐっても明るみに出た²⁸。また、2025年のインタビューでも、ホドルコフスキーは、体制関係者を職業で分類して断罪するべきではないと述べ、FBKを暗に批判している²⁹。このような論争は、反体制派として発言する「資格」を持つのは誰なのかをめぐる、ゼロサム的な議論へとつながりかねない。

おわりに

本稿ではここまで、在外反体制派の団結が困難なのはなぜなのかという問いを立てたうえで、その中でも目立つ存在であるホドルコフスキー陣営とFBKの歴史観や責任論の相違点に注目して議論を展開してきた。本稿からは、両陣営が大きく異なる歴史観に立っていること、そして、それが責任の所在についても異なる見解を導き、両者の反体制派としての責任論や正統性を毀損する側面があることを明らかにした。

もちろん、こうした歴史的認識や責任論は誰に語りかけるのかによって大きく変わりうる。とりわけ、FBKの言説には、ロシアに住む一般の人々との関係をどのように構築するかという現実的な要請が反映されていると考えられる。しかし、本稿で明らかにした両陣営の歴史観や責任論は、単なるターゲットの相違によっては説明しきれない。1990年代の政治経済秩序の形成に深く関与したインサイダーとしてのホドルコフスキーと、その秩序の外側から登場したアウトサイダーとしてのFBKの間には、両者の政治的・社会的立ち位置の差異を反映した、より根深い断層が存在しているのである。

本稿から明らかになった責任論のすれ違いは、在外反体制派が現在どのような議論を展開しているのかという現状分析にとどまるものではない。それは、戦争が何らかの形で終結した後には本格化するであろう、過去の総括をめぐる重い議論を先取りしている面もある。とりわけ、誰がどのような言葉で侵略の過去を語り、いかなる形で責任を引き受けるのかという問題は、戦後のロシアにおける言説空間において避けて通ることのできない争点となるだろう。本稿の分析は、そうした戦後の議論を考えるための一つの視座を提供するものである。

(脱稿日 2026年1月27日)

¹ ホドルコフスキーと長く協働してきた人物として、レオニード・ネフズリン、ウラジーミル・カラ＝ムルザ、セルゲイ・グーリエフらが挙げられる。個々に多少のニュアンスの違いはあるものの、大まかな方向性は近いと考えることができる。

² Roman Goncharenko and Daniil Sotnikov, “Will Russia's opposition show a united front in Berlin?,” Deutsche Welle, 16.11.2024, <https://www.dw.com/en/will-russias-opposition-show-a-united-front-inberlin/a-70798672>. 以下、URLの最終アクセス日は2026年1月9日である。

³ Kirill Shamiev, Ksenia Luchenko, “Life in Exile: A new approach to Russian democrats in Europe,” *European Council on Foreign Relations*, 03.2024, <https://ecfr.eu/wp-content/uploads/2024/03/Life-in-exile-A-new-approach-to->

Russian-democrats-in-Europe.pdf.

⁴ Mikhail Turchenko and Margarita Zavadskaya, “Mapping the Opposition in Exile,” *Russian Analytical Digest*, 317, 11.09.2024, pp. 6-9, <https://doi.org/10.3929/ethz-b-000692534>.

⁵ Mikhail Khodorkovsky with Martin Sixsmith, *The Russia Conundrum: How the West Fell for Putin's Power Gambit - and How to Fix It*, St. Martin's Publishing Group, 2022, Chap. 22, paras. 23-24. (本稿における段落番号は、当該テキストのデジタル版において、節の冒頭からすべての段落を順に数えたものである。)

⁶ 同組織は、ロシアにおいていわゆる「望ましくない組織」と位置づけられた団体を対象とする一連の法改正および運用の強化を受け、2021年5月、支持者への刑事リスクを避けるために「自発的解散」を決定した（「Открытая Россия» объявила о самоликвидации *Коммерсантъ*, 27.05.2021, <https://www.kommersant.ru/doc/4828390>）。

⁷ Anti-War Committee of Russia (Антивоенный комитет России), Official website (homepage), <https://antiwarcommittee.info/>.

⁸ The Ark (Ковчег), Official website (homepage), <https://kovcheg.live/en/ark/>.

⁹ ナワリヌイのこれまでの活動については、ヤン・マッティ・ドルバウム、モルヴァン・ラルーエ、ベン・ノーブル（熊谷千寿訳）『ナワリヌイ プーチンがもっとも恐れる男の真実』NHK出版、2021年を参照。また、ナワリヌイの獄中での回想をまとめた著作であるアレクセイ・ナワリヌイ（斎藤栄一郎・星薫子訳）『PATRIOT—プーチンを追い詰めた男 最後の手記』講談社、2024年においても、それまでの活動が詳しく記されている。

¹⁰ ACF International (Anti-Corruption Foundation International), Official website (homepage), <https://fbk.info/en/projects/acfinternational>.

¹¹ ナワリナヤの活動については拙稿「ロシア国外の反体制派—ユリア・ナワリナヤ」（『国際問題研究所令和6年度報告書』第5章、https://www.jiia.or.jp/pdf/research/R06_Russia/5.pdf）を参照されたい。

¹² Khodorkovsky with Sixsmith, Chap. 3, para. 3.

¹³ Khodorkovsky with Sixsmith, Chap. 3, para. 5.

¹⁴ Khodorkovsky with Sixsmith, Chap. 3, para. 12.

¹⁵ Khodorkovsky with Sixsmith, Chap. 6, paras. 3, 5, 10.

¹⁶ ナワリヌイ『PATRIOT』第7章。

¹⁷ Khodorkovsky with Sixsmith, Chap. 4, para. 12.

¹⁸ «Мои страхи и ненависть», *Навальный (navalny.com)*, 11.08.2023, <https://navalny.com/t/1582/>.

¹⁹ プロジェクトの説明および動画へのリンクは公式サイト『裏切り者』ページを参照（ФБК, Серилал «Предатели», <https://fbk.info/ru/projects/traitors>）。動画は第1部が2024年4月16日、第2部が2024年4月23日、そして第3部が2024年5月1日に公開されている。『裏切り者』が賛否のわかれる論争を呼び起こしていることを概観した論考として、Irina Borogan and Andrei Soldatov, “Russia and the Damned 1990s,” Center for European Policy Analysis, 23.04.2024, <https://cepa.org/article/russia-and-the-damned-1990s/>を参照。

²⁰ Khodorkovsky with Sixsmith, Chap. 18, para. 18.

²¹ Khodorkovsky with Sixsmith, Chap. 18, para. 19.

²² Khodorkovsky with Sixsmith, Chap. 18, paras. 6-7.

²³ «Вина всех россиян?», *Михаил Ходорковский (YouTube)*, 24.12.2023, <https://www.youtube.com/watch?v=eLuuzZtozik>.

²⁴ «15 пунктов гражданина России, желающего блага своей стране», *Навальный (navalny.com)*, 20.02.2023, <https://navalny.com/2023/02/20/>.

²⁵ FBK が作成している名簿は公式サイトにある sanction tracker のページで閲覧できる（Anti-Corruption Foundation International, *Sanctions Tracker*, <https://sanctions.acf.international/>）。

²⁶ «Россия — это не Путин. Объявляем акцию гражданского неповиновения», *Навальный (navalny.com)*, 28.02.2022, <https://navalny.com/p/6607/>.

²⁷ Andrew Chakhoyan, “Opinion: The Russian opposition needs to stop blaming Putin and start confronting Russia's violent imperial legacy,” *Kyiv Independent*, 15.10.2024, <https://kyivindependent.com/opinion-the-russianopposition-needs-to-stop-blaming-putin-and-start-confronting-russias-violent-imperial-legacy/>.

²⁸ ホドルコフスキー自身はこの動画の主要な登場人物とはされていないものの、1996年大統領選挙に向けてエリツィン陣営に資金提供を行ったことなどが明かされており、FBKの言説に沿えば、ホドルコフスキーもまた、プーチンの登場を後押しした「共犯」の一人であったかのように見える。これに対し、ホドルコフスキーは、今この問題を取り上げることはかえって現在の権力集団の責任をイデオロギー的に「薄める」

危険性があると指摘したうえで、1990年代の改革者を一方的に断罪していることに対して強い違和感を表明している（“The film "Traitors." My unedited opinion”, *Михаил Ходорковский (YouTube)*, 22.04.2024, <https://www.youtube.com/watch?v=yvCEULANjBg>）。

²⁹ “Mikhail Khodorkovsky: What he thinks about today’s Russia”, *Khodorkovsky.com*, 19.01.2025, <https://khodorkovsky.com/mikhail-khodorkovsky-what-he-thinks-about-todays-russia/>